

ケータイ・メディア教育の教材開発に関する研究

～子どもの利用実態を踏まえたリテラシーの確立を目指して～

Development of Teaching Materials how can Teach about Mobile Internet
Base the children's use realities and establishment of literacy.

次世代教育学部学級経営学科

筒井 愛知

TSUTSUI, Yoshitomo

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：携帯電話，メディアリテラシー，インターネット

Abstract： It was developed in Japan in advance of the world in 1999 the cellular phone connected with the Internet. Various information like the character, the photograph, and animation, etc. can be obtained from the net now, and it send it to the net. 30 percent of the grade-schooler, 70 percent of the junior high school student, and 90 percent or more of the high school student have such a cellular phone. Children believe information though do not understand Internet world enough, send information, and various crimes and the troubles have occurred while doing the communication as others. Therefore, various measures are thought as the law is enacted. However, the trouble is able not to be prevented completely, and, then, new media literacy in the cellular phone and the net age is requested.

In this text, if what ability is acquired to the side used, can the cellular phone able to be used well without encountering the trouble, and it introduces the approach.

Keywords： cellular phone, media literacy, Internet

I. はじめに

世界で初めてインターネットに繋がる携帯電話が発売されたのは1999年のことである。最初は文字しか表示できなかったが、その後写真などの画像が表示できるようになり、さらに動画も表示可能となった。今では写真やビデオの撮影や音楽の再生なども可能となり、様々な情報を取り扱うことができるようになっていく。携帯電話一台で、文字や写真や動画の情報を、ネット上に気軽に発信することも出来る。

このように、この10年間の携帯電話端末の機能の進歩は目覚ましい。なお、本稿では携帯電話及びPHSを合わせてケータイと表記する。

一方それに応じた料金体系も常に見直されている。当初は通信したデータ量（パケット）に応じて課金される従量制だったため、高額な請求に悩む若者もいた。パケットの利用のし過ぎで、料金が払えなくなる

状態を表した「パケ死」などの言葉も生み出された。その後2003年にはパケット定額制が開始される。これは月々一定額を支払うことで、いくらデータをやり取りしても、パケット料金がそれ以上かからないというサービスである。これに加入することで高額な請求に悩まされることは少なくなったが、そのためかえって長い時間をケータイに注ぎ、中毒になる者が出てきた。

また、この10年でケータイからインターネットを利用する10代から20代に向けられたサイトが数多く開発されてきた。ケータイ小説のヒットを生み出した「魔法のiランド」、後発ながら1200万人の会員を擁する「モバゲータウン」などである。

ケータイを取り巻く環境のこのような変化により、子どもの生活の様子や習慣がすっかり変わってしまい、人と人との繋がり方も大きく変化した。友達の近況や動向を日記で確認したり、日記にコメントを付け合うという関わり方をしたり、今あったことをすぐに

ネット上に発信したり、同じ趣味を共有する人をネット上のコミュニティで探したりといったことは、ネットを使いこなしている子どもにとっては日常のことである。

ところが、他方ではその変化した便利さを上手に使いこなすことが出来なかったり、便利な道具に頼り切ってしまうため様々なトラブルも起きている。これは、ネット上のコミュニケーションや情報発信の特性を十分に理解せずに使うために起きることも多い。特に子どもは、ケータイの利用方法を大人に教えてもらう機会はほとんどなく、また対人関係における様々な経験や能力を十分に身につけてもいない。

このためケータイの便利さに振り回されて、従来では考えられなかったようなトラブルが起きている。本稿では、このような現状を様々な事例を元に考え、必要な教育・教材のあり方を考える。

Ⅱ. 従来の教育・啓発活動

1. ケータイ教育のこれまでと現状

従来小学校ではケータイに関する教育が行われることはほとんど無かった。これは教員にも親にも、その必要性が感じられていなかったからである。中学では「技術家庭科」の中でインターネットのマナーなどについて多少触れることはあるものの、ケータイやネットのトラブルやマナーについて系統立てて教える機会はない。高校も同様で、「情報」の時間の中で、トラブルを起こさない、巻き込まれないといったことを扱うのは、年間1時間か2時間程度である。

従って、ケータイ教育をしようとするれば、それは教科の中ではなく、ロングホームルームや学年集会で年に一度の講演会などの時間をあてて行うことになる。これらの講演の必要性は学校により大きく異なっている。またその内容も、犯罪を防止する観点で行われる「防犯教室」や人権意識の高揚を目的とした「いじめ防止教室」など様々である。学校では多くの人権課題があるため、毎年ケータイの話題に絞ることは難しいものの、講演を行う学校ではケータイの問題は避けては通れない課題として認識されている。

ケータイに関する教育は、教員が自らの知識で児童・生徒に教えるのには限界がある。このため講師は地域の警察署から派遣されてきた生活安全課のスタッフやe-netキャラバンの出張講演サービスを利用してNTTドコモのスタッフなどにより行われている。また予算が確保できれば、全国的に活躍している専門家を招い

ての講演を行う場合もある。

2. ケータイ教育の実践の状況

筆者はかねてから様々な社会教育活動を通じて、小学生から20代までの幅広い世代の若者と交流を続けてきた中で、様々なケータイトラブルを目の当たりにしてきた。中高生にとっての身近なケータイの問題は、犯罪被害やネットいじめといった表面化しやすいトラブル以外にも、お互いに悪意がないのにトラブルに巻き込まれてしまう場合や、生活習慣の問題など様々な問題がある。

2005年以降、中高生が関わっているトラブルが増加するにつれて、ケータイに関する教育の必要性が少しずつ認識されてきた。筆者へのケータイのマナー講座の依頼が最初にあったのは2005年の2月で、2005年度末までの依頼件数は8件であった。これはいずれも地域の保護者を対象とした公民館講座であった。翌2006年度は5件だったが、2007年度は18件と徐々に増加してきた。公民館だけでなく、中学生向けの依頼や県の青少年課からの依頼、また県教委からの依頼も出てきた。

そして2008年度は依頼数が激増し県内各所の中学高校でケータイに関する講座が開催されるようになった。これは岡山県教委から公立の学校へ、ケータイやネットいじめに関する教育や研修をするようにという通達が発せられたことも大きい。それ以上に学校でのトラブルが無視できないほどに日常化していることをうかがわせる。このため2008年度の講演依頼の問い合わせ数は100件以上であった。この流れは小学校での小学生向けの講演や幼稚園での保護者対象の講演へと広がっている。これらの子どもや保護者や教員を対象にした講演活動の中で筆者が実施したアンケートにより、ケータイに対する様々な疑問点も寄せられるようになった。

このように世間での関心は年々高まっている中で、まず利用実態を分析して、続いて子どもや保護者、教員の感じている問題意識を調査した上で、どのような点に重点を置いて教育を進めていけばよいのか考えてみたい。

Ⅲ. 利用実態

現実の子どもたちの置かれている現状は、教育や情報が足りないために、それほど悪意があるわけではないのに、結果的に他人を傷つけてしまったのではない

かと思われるトラブルが頻発している。

以下に県内で起きた様々な事例をパターンに分類して紹介する。

1. 知り合いによる悪意のあるイタズラ

ここに分類されるのは、比較的わかりやすいものである。悪意のあるものがケータイの匿名性を利用して、身近な人を陥れるという構図がはっきりしているからである。

匿名性には色々あるが、掲示板を利用するもの、メールを利用するもの、チェーンメールを利用するもの、プロフを利用するものなど様々である。

成りすましメールで中学を転校

あるとき女子中学生Aによって書かれたクラスの友達Bの悪口のメールが複数のクラスメイトに届いた。生徒の話からAが悪口のメールを送ったものと判断した教員が、Aを指導したところ、Aは自分は送っていないと主張。クラスメイトの携帯にAからのメールの履歴が残っていることが確認できたため、さらにAを詰問したところ、Aはこの中学を転校した。

実はこのメールはAが送ったものではなく、第三者がAのふりをしてアドレスを偽装して送った「成りすましメール」であった。

成りすまして彼氏と別れそうに

高校生のカップルの双方に、お互いから別れ話のメールが届いた。不審に思い直接話してみると、お互いにそんなメールは送っていないという事がわかり、別れずにすんだ。

このメールは二通とも「成りすましメール」であった。

サイトに他人の情報を載せた高校生が退学

女子高校生が、顔写真と学校名と連絡先をネット上に載せられて、見ず知らずの男性からたくさんの連絡が来るようになり、警察に届けたところ、その情報を勝手に載せたのは別の高校の男子生徒と判明。先方の高校とも相談した結果、その高校生は退学処分となった。

モバゲータウンで同級生の女性が成りすまし

女子高校生に他校の男子高校生がモバゲータウン内で近づいてきて、話が弾んで意気投合したとこ

ろで、相手の男子高校生は実はクラスの仲の悪い同級生の女子が成りすましたものだということがわかり、バカにされた。

同級生の裸の写真をメールで発信

同級生の女子高校生の裸の写真がメールで回ってきた。

裏サイトへの悪口

女子中学生が学校裏サイトに「彼氏の子どもを妊娠した」と書き込まれた。

他人に成りすましての悪口

他人の名前を騙って別の人の悪口を言う書き込みで、お互いの仲が混乱した。

これらは、「困らせてやろう」という加害者の側の意図が明確である。自分の素性がばれないだろうと思いい、普通なら出来ないようなイタズラを気軽にしてしまったのであろう。

いずれもすぐには発信者を特定しにくい。しかし、ひとたび被害届けが出て犯罪として捜査されればわかる場合もある。一方で警察が捜査してもわからない方法もあるし、実際に警察が調べることが出来ない場合もある。犯罪として捜査するほどの場合ではないケースや、捜査したくても技術的に難しい場合である。

これらの加害者は、もしもケータイやネットが無ければ罪悪感を感じてしまい出来なかったことが、罪悪感をさほど感じないため気軽にトラブルが起きるのである。こうしたトラブルを防ぐには、使う側の倫理意識を日常生活における倫理意識以上に、より高めていくしかない。面白半分や軽い気持ちでネットやケータイでのイタズラをすると、現実以上の大きなトラブルになるということを認識させなくてはいけない。

2. 不特定多数を対象とした詐欺被害

これは悪意のある者が、楽に金を手に入れたくて行うもので犯罪である。これらの被害にあわないためには、犯罪の手口を周知することが必要である。

PSPで2万円請求される

男子中学生が、携帯型のゲーム機プレイステーションポータブル（PSP）からブラウザでサイトを見ていたところ、2万円請求されそうになったが、母親に電話してもらい騙し取られることは無かつ

た。

登録していないサイトからの請求

無料の着歌サイトの業者が別の業者に顧客名簿を違法に流していたために起きた。

占いのサイトに登録したつもりが別のサイトに登録された

意図的に登録の仕組みをわかり難くして、本人は登録したつもりがないのに、登録されてしまい料金を請求しようとする手口や、登録しようとした無料サイトではなく、本人が意図していない有料サイトに登録したように誤解させる手口。

詐欺は、大人でも被害にあう人が後を絶たない。婚活サイト詐欺や、振り込め詐欺のように、人と人との情や繋がりを利用したテクニックや、年金還付詐欺のようなお金が手に入るという心理を利用したもの、ワンクリック詐欺、ツークリック詐欺などネットの仕組みをよく知らない人を誤解させるテクニックなど様々である。

またネットやケータイでの会話は、直接話をするのに比べて、情報が十分にやり取りできないため誤解を生みやすい。またネット越しだと、詐欺を行う側の罪悪感が薄れてしまい、やりやすいという面もあると考えられる。これらのトラブルを防ぐには、新しい手口が生み出されるたびに、周知することが必要である。

3. ネット上の嘘に振り回される

このパターンは、ネット上の情報で、困っている人がいたり、世の中で間違っていることが起きているということを知った人が、それを何とか良い方向に持っていくために自分の力を注ぎたい、という気持ちから起きる。嘘の情報を流す加害者は、1の悪意のあるイタズラや、2の詐欺などのパターンである。

犬のメールで担任に相談

小学五年生の女兒が「犬のもらい手を捜しています」という内容のチェーンメールを友達からもらい、それを信じて、担任に「犬の飼い主を探している」と相談したところ、半日かけて担任と一緒にポスターを作ってくれた。その後、その情報がメールによるものだということを担任も知るところとなり、嘘と判明した。

血液の提供者を募集するメール

「白血病の手術をしなくてはいけないのに、珍しい血液型なので血液がなくて手術がストップしている。ついては提供者を募集している」という知人からのチェーンメールを信じて転送したり、メールに書かれている病院の電話番号に連絡して、その病院に迷惑をかけてしまう。このメールも嘘であるが、内容が真に迫っていて、つい信じて回してしまったり連絡してしまう。大人の間でも回されているメールである。

近くのヨーカドーに関する噂のメール

「ヨーカドーに子どもを狙った変質者が出る」というチェーンメールを転送する母親。これも早く知らせたあげなくてはという善意の心理を悪用したチェーンメールである。

これらのトラブルは、比較的身近な友達同士で回ってくるメールによる情報が元になっているだけに、子ども社会全体に周知していくことが必要である。

ネット上には、「自分は困っているから助けて欲しい」という悪意のある嘘をつく人がいるということを十分に理解させることが必要であるし、チェーンメールの仕組みも知らせる必要がある。

そうしないと、せっかく「人を助けたい」と思って行動したのに、そんな自分がバカらしくなってしまう、人のために行動することまでもが、バカバカしく思えてしまいかねない。

これらの嘘の情報は、第一発信者が罰を受けることがない場合も多いだけでなく、内容を信じて情報を転送した自分が犯罪者になってしまうこともある。

4. 個人同士のコミュニケーションのトラブル

ここに分類されるのは、知り合いとのメールのやり取りのトラブルである。メールをしてもいい時刻、本文の長さ、返信までの時間、文体など、子ども同士のルールもあれば、社会人としてのルールもある。これらのルールは、手紙と違って、学校で教えられることはないため、ルールの違うもの同士がコミュニケーションをするとトラブルになる。

メールを送る時間帯のトラブル

筆者がかつて、当時指導していた部活の高校生に夜寝る前にケータイにメールしたところ、翌日「夜中にメールしないで」と怒られた。「電源を切って

おけばいいのでは？」とアドバイスすると、「大事な人から連絡が来るかもしれないから切れない」とのこと。

退部の連絡をメールで送りトラブル

高校三年生が部活動を退部したい旨を直接言うことが出来ず、メールで連絡をしたところ、メールもらった側は気持ちが伝わらないと感じ、卒業以後も仲が修復することはなかった。

彼氏と付き合って三ヶ月間メールで束縛されている

高校二年生の女子生徒が、付き合っている彼氏が、避妊せずに体の関係を持つという噂を前の彼女から聞いて、そのことで不安に思っ、相談にきた。聞いてみると、付き合って三ヶ月彼氏とは電話での会話が数回、直接会って話したことはなく、ほとんどがメールのやり取りだった。

返信が来なくて「まくられた」と感じる

高校一年生の女子生徒が、知人からメールの返信もないし電話をしても折り返してかけてこないため「まくられた（意図的に無視された）」と憤る。

中学生からの大人へのギャル文字メール

「明日σ障スポσvノは一±ゑ（≠Mαすカ、？」

これはダンスを教えていた中学生から筆者の元に届いたメール。翻訳すると、

「明日の障スポのリハーサルきますか？」となる。

「の」を「σ」、「る」を「ゑ」、「さ」を「±」と似た形の別の文字への置き換え、「り」を「vノ」、「き」を「(≠)」と二文字で表現するなど、様々な手法がある。

聞くと、普通の表記をするよりは、表現が凝っていて手間がかかるため、より相手のことを思いやっている丁寧なメールだとのこと。

しかし、これらの手間を省くために、ギャル文字と通常の表記の相互の変換をしてくれるサイトも多数存在している。

部活では本音を言わないのに夜メールで送る

中学生からの相談で、部活の最中は自分の思っていることを言わないのに、夜になるとメールで部員のことを悪く言う内容のメールを送る人がいるというところで悩んでいる。

メールは、丁寧に言葉を選んで書けば手紙のようでもあり、短時間に何往復もさせれば会話のようでもあり、色々な使われ方をする。最も身近なコミュニケーション手段だからこそ、プライベートとフォーマルが混ざってしまいがちで上手に使い分けるのにはトレーニングが必要だし、ルールを使い分けも必要である。

また文字や絵文字だけでのコミュニケーションのため言葉の行き違いがあったり、こちらのメッセージを受け取った相手の感情や反応がすぐには見えないことも、スムーズではないもどかしさを感じさせる。

個人同士のコミュニケーションのトラブルは、そのようなネットやメール特有の性質が元となり気持ちが通じ合わずに様々なトラブルが起きていると考えられるので、メールの使い方では受け手のことをよくよく想像することが大切だということを伝える必要がある。

5. ネットで知り合った人とのトラブル

ネット上には「いわゆる出会い系サイト」以外にもプロフや掲示板などの出会いの場が数多くある。そこでメル友を探したりすることは、比較的日常的な行為である。それが現実の出会いに発展するケースもそれほど珍しいことではない。

曲の編集をしてくれるDJにすっぱかされた高校生

高校の女子生徒が、ネットで知り合ったDJにダンスで使う曲を編集してもらえとのこと、夜の8時に岡山駅前待ち合わせとのこと。聞いてみると、東京でイベントを開いたこともあるし、大物タレントの湘南乃風とコラボしたこともあるとのこと、どうも話が大きすぎて胡散臭い。翌日聞いてみると、行ってみただけ結局すっぱかされて帰ってきたとのこと。

路上ライブをする仲間をネットで見つける高校生

高校の女子生徒が、ネットで知り合った人と路上ライブをするとのこと。心配になって聞いて見ると、相手も同じ高校二年生で、その人の通っている高校の部活に自分の中学のときの同級生がいるので大丈夫とのこと。実際に路上ライブをした。

写真とは別の男の人が複数で来た

高校の女子生徒が、モバゲータウンで知り合った人に会いに行ったら、写真とは別の人が複数で来たとのこと。恐らく、相手は最初から別人の写真を送っ

てきていたのであろう。

岡山市内のある中学でのアンケートでは、ネットで知り合った人と会うことに抵抗がないものが相当数いることがわかる。約3割は抵抗がなく、実際に会ったことがあるものも2%程度いた。個人的にメールをやり取りするうちに相手の人となり判断できると考えているようであるし、会ってもトラブルにあわないケースもあるため、ポジティブな面についてひかれてしまうのだろうが、ネガティブな面があることを伝える必要がある。

6. 情報発信のトラブル

このパターンは、自分が発信した情報を事前に想定していない人に読まれて起きるものが多い。「友達に回して」と書いて回してもらったメール、掲示板への書き込み、日記への書き込みなど、一個人にではなく、多数の人に発信する情報がネットやメールにはあるが、その情報はいつ誰が読むのかは、中々想像しにくい面がありトラブルにつながる。

クラスの友達の写真を回してトラブルになる

高校一年生の男子生徒が授業中にケータイでクラスメイトの写真を撮ったところ、面白い写真が撮れたので、メールで友達に回した。すると写真を撮られた友達が傷ついた。ところが、回していた側にはあまり罪悪感がなかった。相手を直接攻撃したわけではなかったからであろう。

仲良し三人組が作ったホームページで友達の悪口

中学二年生の女子生徒が仲良し三人組で作っていたホームページにクラスの複数の友人の悪口を書いたところ、クラスの友達がそのページを見ていて、何人かが不登校になった。

これらのトラブルは、本人は相手を傷つけようという意図が必ずしもあるわけではない。そうではなく、単に友達同士で雑談したかっただけなのかもしれない。ところが、それをサイトやメールで行ったために、学校やクラスなどの複数の人もその情報を見るところとなり、結果的に、大声で悪口を言ったり笑いのにするのと同様の行為をしてしまったことになる。

他にも日記サイトに自分のことを書いていたら、本名は書いていないのに特定されてしまいトラブルになることもある。

自分が発信した情報は誰が読むのか、それは自分にコントロールできるのか。そういったことに無自覚で、便利で楽だから使ってしまうのだが、その結果トラブルになるのである。これらのトラブルを防ぐには、情報の発信の仕組みを教える必要がある。

7. 生活習慣のトラブル～依存症～

このパターンはケータイに頼りすぎてしまい、いざとなれば何とかなると考えて、事前の準備を十分にしていなかったり、ケータイを使いすぎてしまいトラブルにつながるものである。トラブルと言えるほどのトラブルではないため見落とされがちだが、生活の基本的な習慣に関わる問題なので、発展するとより大きなトラブルになりかねないので注意が必要である。

ケータイを忘れて部活のミーティングを欠席する

高校二年生の女子生徒が電車でケータイを置き忘れた。JRに電話をしたところ落し物係に届いていたのだが、戻ってくるまでの3日間、不安で家から一歩も出ることが出来ず、部活の大切なミーティングを休んでしまった。

知り合いの家の電話にかけられない高校生

高校一年の女子生徒が、中学のときに気になっていた同級生の男子生徒が別の高校に通っているという。自宅の電話も住所も家の場所も知っているというので、「会いに行ったら」と言うのと、「アド知らないから連絡できない」とのこと。

忘れ物に気がつかない高校生

高校二年生の女子生徒が、明日がコンテストの本番という最後の練習の日に、練習で使う音源を忘れてきた。「何とかなると思った」とのこと。

その場でケータイで確認して準備不足を補う

ダンスの曲の編集に来た男子高校生が、編集集中にチームのメンバーに電話をしてその場で曲を確認しながら作業を進めた。このため無駄に時間がかかってしまい、迷惑をかけてしまうし効率も悪い。

その場でバイトの言い訳をする女子高生

高校生の女子生徒が、バイトが遅れそうになったので、バイト開始の時間ギリギリになって「今日はおなか痛から休みます」と連絡を入れる。

中学のときの恋愛は二週間持たなかった

高校生の女子生徒が、中学時代の恋愛は二週間持てばいいほうで、その繰り返しだったとのこと。

初デートが別れの日

高校生の女子生徒が、中学時代は付き合う当初はメールのやり取りでお互いの妄想が膨らむが、いざデートしてみると想像と違いすぐに別れる。だから中学のときは初デートが別れの日とのこと。

請求額が100万円

中学生の親が、子どもがネットにつなぎすぎて請求が120万円だった。あわててパケット定額制にしたものの翌月も100万円請求された。

パケットの使いすぎ

男子大学生の、ある月の利用が500万パケット。実際に払えば100万円かかる量である。それだけの時間をケータイに注いでいたということになる。

一人の時間が持てない

岡山県教委の調査によれば、毎日5時間以上ケータイを使う中学生は14.9%、高校生は15.9%。家に帰ってから寝るまでケータイをしている人がかなりいることがわかる。

ケータイを取り上げると暴れる高校生

高校一年生の男子生徒から、指導上一時的にケータイを預かる場面で、素直にケータイを渡そうとしない。ケータイが体から離れると極度に不安に陥る。

メールで親子喧嘩をする高校生

高校一年生の女子生徒が母親と喧嘩したので友達の家泊まりたいというので聞いてみると、その喧嘩はケータイのメール同士であった。

電話なら数分で済む用件をメールの往復で数十分

明日のイベントの場所を聞くなどの事務的な連絡を一問一答式で何往復もかけて聞いてくるので、長い時間がかかる。

家出した中学生

知り合いの中学生の母親が電話をしてきた。何でも一晩連絡が取れないとのこと。友達の名前も、ニックネームしかわからず、どこにいる何歳の人かも知

らないので、連絡できないかと相談してきた。

買出しで訪れた店からの電話

高校生が買い出しに行ったものの、事前に確認した買出しのリストはあやふやで、行った先のコンビニから電話で確認してくる。

これらの様子から、ケータイに依存した日常生活が見て取れる。あるいは依存とはいえないまでも生活の隅々にケータイが入り込んでいることがわかる。通話料金よりメールのほうが格段に安いので、友達とも通話はあまりせずにメールがメインになっていることも、トラブルの原因になっている。

また大人の間でもそういったことがある。

「先生の前任校での評判をメールで回す」「保護者同士のメールによる仲間はずし」「参観日に携帯電話で授業の様子を写真撮影する」「授乳しながらメールする」「子どもと散歩しながら子どもを無視してメールする」「学校への抗議をメールで匿名で行う」。

こういった話は多数派ではないかもしれないが、珍しい話ではない。

ここで取り上げた事例は、事件に発展するほどのことではないため、表に出ることも少ないが、中高生の周辺ではこのようなことは日常的に起きていると考えてよい。

では、これらは犯罪とまでは言えないから、放置しておいてよいのかと言えばそのようなことは無い。発展すればより大きなトラブルになる場合もあるし、子どもの人間形成にケータイでつながっている人間関係が大きく関与していることが見て取れるからだ。

Ⅳ. アンケートから

続いて子どもや保護者、教員の感じていることを見てみよう。

1. 小学生からの質問

小学生の質問は、基本的な使い方やトラブルにあわない方法に関するものが多い。例えば以下のようなものである。

6年男：うそか本当かを見ぬくには、どうしたらよいですか。

6年女：私はケータイを持っているんですが、メールをする時にみんな絵文字をつけますよね。絵文字

で顔の絵文字で気持ちを少しでも分かってもらうのに使うのっていいのですか？

2. 中学生からの質問

中学生になると周囲にトラブルも増えてくるため、より具体的な疑問が増えてくる。

2年男：チェーンメールを送らなくってこられた人はいるんですか？

2年男：なぜ、にせのチェーンメールを送ったりするんですか。

1年女：夜中にさびしくて誰かとつながりたいと思うことは悪いことですか。

3. 高校生からの質問

高校生はケータイを使う自分自身に対する不安や、友達との関係など、より深い疑問が増えてくる。

女：人とかかわるのが苦手なのでなかなか素の自分を出せません。どうすれば良い人間関係を作れますか？

女：けいじ板で中傷されたので仕返ししたら、その人が病んでしまったが、それは私のせいなのか、
2年女：今サイトに登録したらお金が勝手に自分のところに入るというサイトが周りではやっているけど本当にお金もらえるんですか？（別の人がサイトにとうろくしたら自分に金が入る的な）

2年女：携帯がないと周りに迷わく。今の世の中携帯もつべき!!

3年女：何回「送っちゃダメ」と言ってもチェーンメールを「ちゃんとした所（人）からだから大丈夫」と言って送ってくる元・同級生がいます。どうすればいいのでしょうか？

男：ケータイ電話を持っていると、自分が忙しい時にメールが来ると困るので、その対策を教えていただきたいです。

女：好きだった人が、別れたらアド変を教えてくださいなくて、私と連絡とりたくないし、嫌われてるかなって思うんですが、どうしたらいいですか？

4. 教員からの質問

一方教員からは、指導の必要性はあるものの現実問題どうしていいかわからなくて困っているという疑問が多い。

「ケータイを学校にもってこないように」というだけでは、問題は解決しません。ある程度学校で子どもに指導をする必要があります。しかし、学校でこれを指導する時間は、学活の時間だけですが、週1時間だけで、ケータイの使用以外の大切な内容もたくさんあります。つまり、指導時間数がたりません。具体的な解決方法は、ないのでしょうか？

参観日等でも最近は保護者がケータイでメールを見ていることもあり、まず今の保護者にケータイの危険を理解していただく手だてが知りたい。害があることは保護者もわかってはいるが、自分もその中に入っている現状、大変むづかしい。

親の携帯の使い方マナーを親に知らせるのがむづかしいです。何かいい方法があったら教えてください

発信端末の特定は誰が（どの立場が）可能か、電話会社？被害者？弁護士？検事？、重大事件の場合警察のみに開示されるのかどうか？

なりすましメールは見分ける方法があるんですか??少し前に自分のアドレスからメールがきて、とてもこわかったです。

5. 保護者からの質問

保護者の疑問からは自分が指導する立場としての困惑が伝わってくる。

色んな物が私達の身の回りは多く、次から次へと出てきますが、つくる企業側にもっと考え、キセイをする事はできないのか。利益ばかりで良いのか自由すぎないか考えてくれない物でしょうか？

とても勉強にはなりましたが、これから、使い方を制限するのは、むづかしいことです。本人がもともと大人になって就職して、自分の時間が少なくなれば、徐々に改善されていることを願っています。

行政としての取組みで個人のID等を確立し、未成年者等を護るネット社会にできないか？

今の子供に（特に中学生以上）携帯を持たせないのは難しいです。

ブログ内で顔や名前を知っている子供達を見かけます。顔写真はもちろんの事、設定の仕方が良く理解できていないのか、名前、住所、学校名が流出しています。この場合、ブログ内で本人に知らせて良いのか、親に伝えるべきなのか

ネットではうその情報もあるとは思っているが、すべてウソではないのであれば、本当のこと、として何を信じたらいいのか？

6. 質問に共通して見られること

持つ側も買う側も指導する側も、ケータイやネットのことを十分に理解できなかったり、使いこなせなかったりするなど、様々な困惑が見て取れる。これはケータイを介して行うコミュニケーションが、日常のそれとは大きく異なることから来る困惑だと考えられる。

それらの困惑を解消するには、ケータイやネットの特性をよく理解する必要がある。

①相手の表情が見えないこと。②すぐに返信が来るときもあれば、丸一日来ないこともあるなど繋がり方が一定ではないこと。③自分は見られていないと感じること。などの日常ではありえない状況が、普段のコミュニケーションとは別の行動を生み出してしまう要因だと思われるが、そのことを客観的に理解することが必要である。

V. 必要な教材と教育機会

では、どのような対策が社会全体に求められているのだろうか。

現在、ケータイやネットのトラブルに対応する形で整備された法律は、「いわゆる出会い系サイト規制法」「青少年インターネット環境整備法」「プロバイダー責任制限法」「不正アクセス禁止法」「ネット販売に関する法律」などがある。しかし、法律を作ればトラブルがなくなるわけではない。かつて出会い系サイトで起きていたトラブルは、今では非出会い系サイトへ移行しているという。また犯罪にまで発展すれば取り締まることは可能だが、子ども同士のトラブルには犯罪とまではいえないものの、心に大きな傷を残すものも少なくない。このため、法律での取締りでは子どものトラブルをなくすには限界がある。

また、電話会社の工夫しているサービスとして、アクセスを制限する「フィルタリングサービス」や定額

を超えると使えなくなる「リミットサービス」などが実施されている。しかし、これらは根本的な解決ではない。なぜなら、それらのサービスで子どものケータイ使用能力が高まるわけではないからだ。

ではどのような対策が必要なのかといえば、大きく分ければ次の二点である。

1. 学校で使用できる教材の開発

トラブルの中にはケータイやネットの仕組みを知っていれば起きなかったものがある。またケータイやネットを含んだ社会の中で、人間関係をどのように結んでいけばよいのかが確立できていなくて起きるトラブルもある。

これらのトラブルを回避するには、ケータイやネットのリテラシーを高めていくことと共に、人間関係をどのように結ぶかといった基本的な生活習慣や行動を丁寧に育てていくことが必要である。

従ってケータイのリテラシーは、単に危険性を知らせるだけではなく、自分自身が上手に使いこなす能力を身につけることが必要となる。これは、受け取った情報が正しいのかどうかを判断する技術を身につけたり、発信する情報を誰がいつ読むのかなどを考える力を身につけたり、ケータイに頼らずに他の手段を常に模索する力を身につけるなど多岐にわたっている。

これらの能力を培うには子ども自身が自分で使えるワークシートや、使い方をチェックしたり親子で話が出来る資料が必要となる。

2. 学校へ出張して教えられる講師の養成

学校の教員が教えるのが難しい現状を踏まえると、県単位で10名程度の講師を養成したり、講師を派遣する費用を確保するのが現実的である。筆者は2009年4月から市民を対象とした勉強会を開催しているが、この問題に関心を持ち、それを広く伝えたいという意欲を持っている者はそれなりの数がいる。今後、講師としての知識や技術を身につけ、様々な場で実践を重ねていけるような仕組みを作って養成していくことで、多くの小中高校でのリテラシーを促進することが可能なのではないかと考える。

3. 中長期的な対策

現状は、ネット社会の仕組みを教えてもらっていないのに、小学生からそのネット社会へ放り出されている状況である。しかし、社会の仕組みやルールなどは本来は学校で教えるべきである。

国語の時間に手紙の書き方と同様、メールの書き方を教えられるかどうか。道徳の時間に友達を思いやる気持ちを育てると同時に、友達からのチェーンメールの内容を疑う力を育てることが可能か。

ケータイ・ネット社会という新しい社会環境でも通用する人間関係をどのように育てるか、そういったことを今後は検討することが必要となる。

終わりに

ケータイは便利である。「ケータイがないと不便だ」と持っている子どもたちは言う。しかし、不便とはそんなに悪いことなのだろうか。不便なら自分で色々と工夫するし、工夫すれば様々な能力が身につく。逆に言えば便利な道具を持つことで自分自身が色々と工夫する機会を奪われるとしたら、それは成長のチャンスを奪われるのと同じことだと言えはしまいか。コミュニケーションが便利になる道具を使うのだから、コミュニケーションが苦手なままで大人になってしまう危険性を、大人は十分に理解するべきである。

参考・引用文献、資料

1. 石野純也（2008）『ケータイチルドレン』ソフトバンククリエイティブ
2. 尾木直樹（2009）『「ケータイ時代」を生きるきみへ』岩波書店
3. 荻上チキ（2008）『ネットいじめ』PHP研究所
4. 加納寛子・加藤良平（2008）『ケータイ不安』日本放送出版協会
5. 佐野正弘（2007）『大人が知らない携帯サイトの世界』毎日コミュニケーションズ
6. 渋谷哲也（2006）『ウェブ恋愛』筑摩書房
7. 筒井愛知「子どものケータイ利用、生活習慣の危機招く」（2006）朝日新聞12月19日付朝刊
8. 筒井愛知「ケータイ・ネット時代の居場所」児童心理2008年4月号
9. 徳田雄洋（2009）『デジタル社会はなぜ生きにくい』岩波書店
10. 藤川大祐（2008）『ケータイ社会の子どもたち』講談社
11. 藤川大祐（2009）『本当に怖い「ケータイ依存」から我が子を救う「親と子のルール」』

（平成21年11月26日受理）